

20130210UHLシンポジウム

Two Kinds of Ryukyuan Embassy Procession Scrolls from the Sakamaki/Hawley Collection

[01] 始り

本日はお招き有難うございます。40年前、Sakamaki-Hawley Collection と出会ったことが、私の琉球研究の出発点でありました。このシンポジウムでお話しする機会を得たことは、私にとって光栄なことであり嬉しいことです。

UH の Sakamaki-Hawley Collection は、世界でも有数の琉球 Collection であります。そのうち、約 2000 冊は、英国人 Frank Hawley が生涯をかけて収集した蔵書の一部です。Hawley は 1931 年から日本で英語を教える傍らバプーン大学で修士学位を取得し、辞書の編纂と日本研究を行いました。戦後最初の The Times 特派員として再来日し、日本研究を続けました。1961 年、Hawley の没後、坂巻駿三 (Sakamaki Shunzo) が、Hawley Collection 中の琉球・沖縄史料を UH にもたらししました。極めて上質で多様な史料が、分散を免れて一か所にあることは、大変貴重であります。故坂巻博士 (Dr.Sakamaki) に感謝の意を表したい。

坂巻駿三は、1906 年にハワイ島で生まれ、ハワイで最初に市民権を得た日系人の一人でした。同志社大学に留学し、コロンビア大学で PhD を取得し、母校のハワイ大学で日本史を教え、Summer Session の学長となりました。

当時は、William Lebra、Thomas Mretzki、G.H.Carr がハワイ大学に所属していました。坂巻駿三は、この地に「琉球研究センター」を作りたいと考えていました。日本から、小葉田淳 (Obata Jun)・比嘉春潮 (Higa Suncho)・仲原善忠 (Nakahara Zenchu) を招いて、琉球史料の研究を進めました。助手を務めたのが、後にハワイ大学教授となった崎原貢 (Sakihara Mitsugu) 博士でした。研究成果の一つに『Ryukyu: A Bibliographical Guide to Okinawan Studies 琉球書誌稿』があります。沖縄出身の学生だった Victor Okim 博士が目録作りを手伝いました。

本日は、Sakamaki-Hawley collection の 2 つの絵巻物を中心に、幾つかの史料をお見せしながら、話を進めます。Hawley Collection の史料の特色についてもお話します。そして、近世の日本人がどの様に琉球国からの使節を迎えたかと、度重なる琉球使節の渡来が近世の日本人の心の中に琉球のイメージを育てたことについて、述べたいと思います。

[02] 史料構成図

歴史史料を用いるにあたって、勿論、その史料に何が記されているかは重要です。それと同時に、その史料を、何時、何処で、誰が、何のために記したかの検討が必要です。

これは、近世の琉球史料を記述内容から分類して、琉球と中国・日本・薩摩・西欧との関係を簡略に表した図です。琉球史料はまず、琉球国内で記されたものと、国外で記されたものに分けられます。国内史料には、王朝の記録・史書・Local Documents・各家の記録などがあります。中国とは冊封関係にあったので、冊封使の記録などがあり、Dr. Smits がお話になった通りです。琉球国の外において記されたものとしては、日本国内のものが、当然ながら最も多いのです。そしてその殆どが、近世日本において記された琉球に関する著述と刊行物なのです。Sakamaki-Hawley Collection の中心を成すのは、近世の日本において記された史料と、当時の日本において情報として入手できた史料です。

近世の日本人にとって、琉球を意識する最大の機会が琉球使節の渡来でした。近世の日本において記された史料はすべて、琉球使節の渡来と、直接的にあるいは間接的に関係があります。日本の文人達の間には、琉球に関する知識や情報が蓄積されていきました。そして幕末になると、その知識を用いて、日本と琉球国との関係が論じられるようになったのです。

[03]琉球史料目録 Ryukyuan Resources

これは、私が琉球国使節の渡来を研究するにあたって集めた、史料目録の一部です。全部で 527 表題あります。近世の日本において記された琉球関係の史料の、大部分を網羅していると考えます。これを作成したのは 30 年以上前のことで、インターネットも無い時代でしたから、日本中を調べて回りました。今日の状況と比べると隔世の感があります。色付けしたものが、Hawley Collection 所蔵の史料で、110 表題あります。

Frank Hawley は、自らの研究のために異本も集めました。例えば、宝暦 12 年の琉球人漂着の記録である「大島筆記」は、4 件あります。このことが、Hawley Collection の特色です。Hawley Collection の史料全体は、900 標題以上、およそ 2000 冊です。

[04]琉球物刊行物 Publications on Ryukyuan Envoys

11[琉球人行列附]

12[琉球人来朝行列図][琉球賀慶使略][琉球物刊本の陳列]

*[琉球物刊本の陳列]

Sakamaki-Hawley Collection には、今回紹介する絵巻物の外にも、多くの貴重書や希覯本が収蔵されています。その意味で、世界的に有名な Collection であります。Hawley の収集の仕方は何時も徹底していました。関心分野に関わるものは、何でも手元に置こうとしました。UH の Collection でいえば、「琉球」「沖縄」「南島」に関係するものは何でも集めたのです。ですから、この Collection には、考古学の発掘調査報告書から近代小説まで、錦絵から琉球の紅型染の型見本まで含まれています。

従来は、史料的価値は低いと見なされてきた物もあります。例えば、ご覧のような琉球物刊行物です。当時、求めやすい値段で、大量に売り出されました。使節の行列が近づい

て来ると、人びとの関心は高まり、情報を得ようとして、このような行列図を買い求めたのです。

* Sakamaki-Hawley Collection には、様々な種類の琉球物刊行物があります。

* 同じ題名でも、刊行年の異なるもの、版元の異なるものが、数多く集められています

* 刊行物は需要に応えた商品です。個々の史料的価値は低くとも、江戸時代の琉球物刊行物の全体を見渡すと、新たな大きな価値が生じてきます。これらの刊行物の「読者」は庶民であります。近世日本人の多くが、琉球の何に関心を寄せたか、またそれが時代を追ってどの様に変容したかが浮かび上がってくるのです。

[05]琉球物刊本刊行年表： List of Publications on Ryukyu

琉球使節の渡来と琉球物の刊行の関係を表したものです。(琉球使節が渡来した年度がマークしてあります。縦線で結んだのが、同じ題名です。使節が来る度に、同じ題名で繰り返し出版されています。)

江戸時代の後半になると、琉球関係の出版物の数が増えます。とくに 1832 年の刊行数の多さは特徴的です。この年には、大きな琉球ブームが起きました。琉球使節への関心が、身分の上下を問わずに高まったのです。背景には、出版の興隆と市民社会の成熟もありました。

* 「中山伝信録」扇の図

琉球に関する複数の著述には、同じような図があります。例えば琉球の扇です。冊封使が記した「中山伝信録」は、日本に入ってきて、日本の出版物として 6 種類も刊行されました。これが「中山伝信録」の扇の図です。

* 「琉球談」扇の図

「中山伝信録」を日本語にしたのが「琉球談」で、何種類も刊行されて広く読まれました。これが、その扇の図です。

* 「琉球年代記」扇の図

これは「琉球年代記」の扇の図です。

* 「琉球奇譚」扇の図

そしてこちらが「琉球奇譚」の図です。

* 「扇の図」転用の流れ

扇の図は、このように転用されました。信頼性の高いと思われる情報は、このように共有されていったのです。

[06][寛文絵巻・行列全体の画像]Prince Kim Scroll of 1670

これは、Sakamaki-Hawley Collection にある、1670 年の琉球国使節を描いた行列絵巻

です。

1634年から1850年までの約200年間に18度、琉球国から徳川幕府へ使節がやって来ました。使節には二種類ありました。一つは「賀慶使 (gakeishi)」で、新将軍への祝賀の使者です。もう一つは「恩謝使 (onshasi)」で、琉球国王が新しく継承されたことを謝する使者であります。使節の人数は平均して百名程度でしたが、琉球使節の前後を薩摩藩の武士の行列が挟む形で進む大行列でした。

使節を迎えた江戸幕府の側には、詳細な記録が残されています。琉球国王からの書簡、使者名と官職、献上物・拝領物の目録、江戸城内での諸儀式、幕府からの通達などなどです。しかし、それらの記録のみでは分からないことも多いのです。どの様な装束で、どんな物をどの様に持ち、どの様に行列を組んだのか。行列を見る人びとに、使節団は何を強調して示そうとしたのか。行列絵巻は、文字史料では分からないことを教えてくれる貴重な情報源です。

[08][行列絵巻の年度・所在表]Scrolls of Ryukyuan Envoys

18度、琉球国から使節がやって来ました。しかし、使節行列全体を正確に描いた絵巻物は、5つの年度のものしかありません。情報化が進んだ今日でも、他の年度の行列絵巻の存在は報告されていません。ですから、使節の渡来の度毎に絵巻が作成されたとは、考え難いのです。Dr.Kurushimaは、先ほど、行列通行の道筋が行う「馳走」(接待)の内容が具体的に定められるのは寛文年間である、と述べられました。丁度、この絵巻の描かれた時期です。

[06][寛文絵巻・行列全体の画像(前出)]Prince Kim Scroll of 1670

行列絵巻は、幕府や大名がお抱えの絵師に命じて描かせました。作成の意図、つまり、何のために絵巻を作成しようとしたのかは、その年度によって異なっていたでしょう。例えば、次のようなことが考えられます。その年度に諸儀礼の形式が大きく改められた。その年度は、使節の渡来が政治的に特に重要な出来事と見なされた。朝鮮通信使との違いを明らかにするために記録する、などです。

作成された年度には、行列の姿を記録に残す必要性があったのです。このような絵巻の作成には、時間も費用もかかります。朝鮮使節の絵巻作成過程については研究されているので、琉球使節の絵巻についても推し測ることができます。

幸いにも、UHには年度の異なる2つの行列絵巻が所蔵されています。寛文11年(1671)と宝永7年(1710)の絵巻です。これら二件を比較することによって、明らかになることは多いのです。

先程からお見せしているのが、寛文11年(1671)の使節を描いた絵巻です。確認できる行列絵巻として、最も古いものです。琉球国王尚貞の襲封を将軍家綱に恩謝するために、正使金武王子以下74名が遣わされました。この使節派遣には、政治的意図が強く働いてい

ました。琉球国王と將軍の代替わりに使節を派遣することを定着させたいという思惑が、薩摩藩にありました。

[07][寛文絵巻・持ち道具 装束 など]Prince Kim Scroll of 1670

- *行列の先頭は、薩摩藩の武士です。20名が2列、斜めに描かれています。
 - *その後に琉球国の使節が続きます。先頭は一对の「鞭 Ben」です。
 - *2本の旗
 - *書簡を持った馬上の人物
 - *琉球音楽を奏する14名の楽人
 - *槍と長刀
 - *一对の旗
 - *そして、荷物持ちを従えた正使金武王子が、輿に乗っています。
 - *琉球の高官達
 - *そのあとに「楽童子ガクドージ」6名が馬に乗って続きます。華やかな装束を身に着け簪を刺した美形の楽童子は、見物する人びとの関心の的でした。
- この絵巻は、後に描かれた絵巻とは幾つかの点で異なっており、古い時代の行列の形式を知る上で貴重です。

[11][寛文絵巻・龍旗と虎旗]Prince Kim Scroll of 1670 / Dragon & Tiger

[宝永絵巻・虎旗二本][朝鮮通信使・龍旗二本]

- *寛文11年の「金武王子絵巻」(“Prince Kim Scroll” of Kanbun 11th year, 1671)には、二種類の旗が描かれています。ヒガ(name)という人物が「龍の旗」を持ち、マタヨシ(name)という人物が「虎の旗」を持っています。次に紹介する、約40年後の、宝永7年「豊見城王子絵巻」(“Prince Tomigusuku Scroll” of Houei 7th year, 1710)では、一对の「虎の旗」になっています。
- *朝鮮通信使を描いた行列図では、一貫して一对の「龍の旗」です。旗の図柄が、琉球国は「虎」朝鮮国は「龍」となる前の、古い姿であります。

[12][宝永絵巻 全体]Prince Misato & Prince Tomigusuku Scroll of 1710

UH所蔵のもう一つの絵巻、宝永7年(1710)の使節を描いた「豊見城王子絵巻」(“Prince Tomigusuku Scroll” of Houei 7th year, 1710)です。これは二本組です。「恩謝(onsha)」のための正使豊見城王子と、「賀慶(gakei)」のための正使美里王子とが描かれています。

この年度の絵巻物は、他にも幾つか存在します。彩色されていないもの、使者人名が記されていないもの、琉球楽器の図が付いているかないかなど、様々です。

大英博物館(British Museum)には、幕府のお抱え絵師である狩野春湖(Kanou Shunko)が描いた絵巻が所蔵されています。残念なことに、それは幾つかに分断されており、全体

像は明らかではありません。内閣文庫の絵巻は、UH のものと、構成も描写も極めてよく似ています。しかし UH の絵巻の末部にだけ、旗などの持ち道具と琉球楽器図が付されています。

宝永 7 年の使節には、賀慶と恩謝の 2 つの目的があり、二人の正使がいました。そのため、使節団の規模が倍の 168 名になっています。この年度は、絵巻物ばかりでなく、使節渡来の記録も、全年度を通じて最も多いのです。具体的な事実が記録として良く残されています。それらを見ると、先ほど述べた「虎の旗」のように、従来の形式と異なるところが多いのです。使節の構成・献上物・江戸城中における諸礼式の形が、整えられたことが分かります。

[13] [行列構成比較図 (寛文・宝永・明和・天保)]Formation

1671 年・1710 年・1764 年・1832 年の、使節行列の構成を比べたものです。宝永 7 年の形式が、その後も踏襲されたことが分かります。

[14] [宝永 7 年絵巻 全体 (前出)]Prince Misato & Prince Tomigusuku Scroll of 1710

この絵巻のことについては、Mr. Seifman が詳しく語ってくれるでしょう。

宝永 7 年度は、翌年に朝鮮国からの使節の渡来を控えていました。そのため幕府は、琉球・朝鮮両国の位置付けを、形の上で表そうとしたのです。

これらの変更には、儒学者新井白石(Arai Hakuseki)の見解が大きく働いていました。新井白石は、琉球国王への書簡を作成し、それまでの記録を調べて、使節を迎える準備を重ねました。白石は明確な世界観を持っていました。朝鮮国に対しては、文化的関連を踏まえながらも、一線を画そうとしました。一方、琉球国との関係の基本は、琉球文化と日本文化の同質性と琉球の日本への従属性である、と考えていたのです。

白石には『南島志』(Nantoushi)など、琉球に関する著作が幾つかあります。それらは、琉球について学ぶための基本書として、琉球に関心を寄せた人びとによって、近代初頭まで読み継がれました。

[15] [朝鮮通信使絵巻]Scroll of Korean Envoys

実は、Sakamaki-Hawley Collection にはもう一件、年代不明の綺麗な行列絵巻があります。よく見ると、朝鮮通信使を描いた物でありました。おそらく、琉球国使節を描いたものと思われて、Collection に加えられたのでしょう。行列を見る人びとにとっては、どちらも物珍しい出で立ちの外国使節でありました。そのため、琉球と朝鮮とは混同されることも多かったのです。

[16] [琉球画誌 先触れ・道普請・棧敷で見物・行列通行]"Ryukyu-gashi"

*街道の人びとにとっても、使節行列の通行は一大イベントでありました。

行列の道筋でどのような準備がなされたか、人びとがどの様に見物したかについては、Dr.Kurushima がお話になった通りです。

これは、先程も紹介された、小田切春江の『琉球画誌』（“Ryukyu Gashi”）という手書き本です。「琉球のお菓子」と「琉球の画帳」をかけた、洒落た題名です。天保3年（1832）、琉球国使節の行列が、城下町・名古屋を通過した際の、一部始終が描かれています。

- * 行列が通る一ヶ月前から、道を直し、屋根をふき替え、瓦を磨いて準備しました。
- * 見物に際しては、「指さし」「高笑い」等の無作法が禁じられました。大通りには見物のための棧敷が組まれました。料金の **32 文(“mon”)**は、立ち食いソバ2杯程度、芝居の立ち見料金と同じ位だったようです。
- * 運よく生まれあわせても、生涯に二度か三度の出来事です。人びとはこぞって行列を見物しました。水を撒いて、箒で掃き清めた道を、行列が進んで行きます。使節行列の強烈な印象は、見物した人の心に後々まで残りました。祭の行列の中に、琉球国の使者の姿が取り込まれることもありました。

[18] [琉球使節道中絵巻]"Ryukyu sisetu douchuu emaki"

Dr.Kurusima も紹介なさった「琉球使節道中絵巻」です。こぞって見物したのは、庶民ばかりではありませんでした。江戸では好奇心の強い大名までが、行列を見物しようと奔走しました。

この絵巻は、寛政2年（1790）のもので、使節の行列全体を正確に描いたものではありませんが、江戸城に向かう行列の間に、門の内から見物する一団が描き込まれています。身分の高い武家はどの様に行列を見物したのでしょうか。それが分かる、興味深い史料です。

[19] [寛文絵巻 全体（前出）]Prince Kim Scroll of 1670

Sakamaki-Hawley Collection の2つの絵巻物を見てきました。いずれも、琉球国使節の行列が詳細に描かれた、美しい絵巻物であります。これらには描かれてはいませんが、行列の周りには、非常に多くの見物する人びとがいたのです。そして、行列から強い印象を受けました。これらの絵巻物を当時目にしたのは、少数の身分の高い人だけでした。多くの人びとは、先ほどお見せした刷り物を手にして行列を見物したのです。

江戸時代も終わりに近づくと、琉球の物産が庶民の生活の中にも入って来ました。琉球はより身近な存在となったのです。琉球を舞台に主人公が活躍する小説、滝沢馬琴の「椿説弓張月」がベストセラーになりました。琉球への親しい思いと南島への憧れが、人びとの間に広がったのです。その様な時に、天保3年、1832年、琉球国使節が渡来して、先程お話した「琉球ブーム」が起きました。近世日本人が抱いた「琉球」のイメージは、琉球国使節が幾度も渡来したことによって形成されました。「琉球は近い存在だ」という思

4/23/2013 9:39 AM

いが、人びとの心の中に育っていったのです。一方で、積み重ねられた琉球に関する情報は、国学者によって、琉球を日本の藩屏と位置付けるための論拠として用いられました。そしてその双方が、近代に受け継がれたのです。